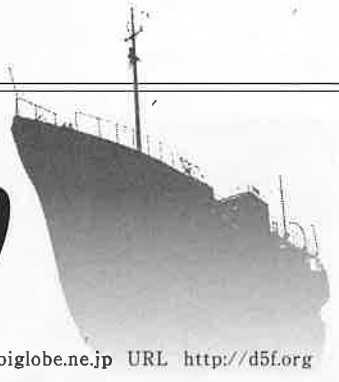


都立 第五福竜丸展示館ニュース

2010.07.01
No.358
(7・8月合併号)

福竜丸だより

発行：公益財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島2-1-1 〒136-0081 第五福竜丸展示館内
Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail : fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org



夢の島のみどりまぶしい中で「第五福竜丸のもとで原爆小景を―核なき世界―」のねがいを込めたコンサートがひらかれ、船体に響きわたった。写真・河田透



被爆65年の夏へ― 第五福竜丸から伝える 核なき世界平和への希い

ニューヨークの国連本部で開かれたNPT核不拡散条約再検討会議（五月三日～二八日）は、「核兵器のない世界」の実現を決意し六四項目の行動計画を含む最終文書を採択しました。

同文書は、核兵器禁止条約の検討を含む潘基文事務総長の五項目提案に留意し、核兵器の使用が壊滅的な人道的結果をもたらすことへの深い懸念を表明しています。また核兵器のない世界への諸政府の役割とともに市民社会のイニシアチブを評価しています。

一方、現保有国とくにアメリカ、ロシア、イギリス、フランスが具体的な核軍縮への諸措置の明記に抵抗し盛り込まれなかったことが報じられています。ひきつづく核廃絶の世論の広がりが高まりが求められます。

（四面に關連）。

平和への希いがひびく

五月九日、林光さんを迎えて「ひびきあう福竜丸のしらべ 原爆小景―ヒバクシャとともに―」のコンサートが開かれました。東京混声合唱団の美しいハーモニ―と寺嶋陸也さんの奏でるピアノ（タカギクラヴィア提供のスタインウェイ）の調べが船体を包み込んだ（コンサート評など二～三面）。
企画展「原爆の子・片岡脩 平和ポスター展」は、新聞各紙にも紹介され多くの来館者が足を止めて見入っています。折から春の修学旅行シーズンにはいり、たくさんの見学校への説明に、連日ボランティアガイドの方々も奮闘しています。生徒たちの感想文を八面に紹介します。

世界のヒバクシャとの

連帯に向かって出航

林光 原爆小景——をきいて…

池田逸子



被爆直後の広島の様状を詠んだ原民喜の詩に四〇年余の歳月を費やして林光が完成させた記念碑的な作品「原爆小景」。その第一章「水ヲ下サイ」につづいて、終章「永遠のみにどり」に込めた核廃絶と平和を祈る声が、第五福竜丸を囲んでいる私たちに降り注ぐ。

広島・長崎被爆六五年の夏を間近に控えて、ことしもまた第五福竜丸展示館コンサート「ひびきあう福竜丸のしらべ」が開催された。ヒロシマ・ナガサキの十年後にビキニ環礁で被災した第五福竜丸に

とつて、また、スリーマイル島やチェルノブイリや東海村や、そのほか地球上の（その多くはまともに報道されていない）さまざまな場所でのヒバクシャにとつても、ヒロシマ・ナガサキは核の脅威の原点である。

だから第五福竜丸とともに「原爆小景」を聴くことは世界のヒバクシャとの連帯の輪を、あらためて一歩広げることになるだろう。さらに、ヒバクの恐怖と隣り合わせの、今なお戦禍にあえぐ世界各地の人々、核保有の疑念を払拭できない軍事施設や災害不安に怯える核施設周辺住民とも

つながっていくだろう。

*

コンサート冒頭、林光がピアノに向かい、バッハの前奏曲とフーガ（「平均率クラブ」）より第一番「ア曲集第一巻」より第一番「ハ長調」を弾くと、悲惨な記憶を証言する展示館が、たちまち（「まつり」）の場となる。

林光の指揮する東京混声合唱団（十四名の特別編成）と寺嶋陸也（ピアノ）がくり広げるプログラムは、一見、脈絡を欠いた、何でもありのよう

でいて、実はそうではない。歌われ、弾かれる多様な音楽に心を開き、耳を傾けていると、死者を弔い、いのちと自由を賛美し、差別や暴力とたたかい、連帯を呼びかけるメッセージが底流となつて静かに聞こえてくる。詩の言葉は音楽と結びついて時空をこえ、（「まつり」）の場で聴き手の想像力を自由に羽ばたかせる。

「雨よ降り」（谷川俊太郎詩）は、（「ナパーム弾」ということばがベトナム戦争を連想させ、「太陽とこども」（林光詩）は（「チグリス」という川の名がイラク戦争で犠牲になった

子どもを想起させるのだが、同時に、いまなお戦闘のただなかにある中近東諸国をはじめとした各地のこどもや、核や化学兵器に汚染された大地、地雷の埋められた大地に降り注ぐ雨をも想い起こさないわけにはいかない。

また、素朴な沖縄の童歌を用いたピアノ曲や合唱曲「島こども歌」のシリーズからは、その土地で暮らす人々のたくましさやユーモア、優しさなどが伝わってくるのだが、同じ人々がいま、基地のある危険な暮らしに怒りの声をあげ、No!と叫んでいる、その思いに連帯の心を重ねないわけにはいかない。

「島こども歌」、「海だべがど」（宮澤賢治詩）、「お菓子と娘」 「ゴンドラの唄」 「もうじき春になるだろう」といった、ホッと一息ついてリラックスできる音楽は（「まつり」）に不可欠だ。緊張ばかりでは息苦しい。自然の姿に驚き、青春を謳歌し、日々を健康に暮らす——人間らしい生活をするには平和が必要だ。

*

寺嶋陸也作曲「雨の降る品

川駅」は昭和天皇の即位式の前に逮捕され強制帰国させられる朝鮮の人々を詠んだ中野重治の詩がテキストである。借用されたショパンの有名なプレリュードの音型に耳を貸しながら重たい内容を聴いていると、その数年前、関東大震災の社会不安に乗じた大虐殺をはじめ、理不尽な差別・虐待を被った朝鮮半島出身者たち、「植民地」時代の甚大な被害はむろんのこと、広島・長崎で被爆した者ですら、いまだに不当に差別されている彼らに、思いがつながらざるをえない。

一方、ベトナム反戦集会で生まれた谷川&武満徹コンビによる「死んだ男の残したものは」や、一九八〇年代ポーランド緊急支援コンサートで生まれた佐藤信&林光コンビによる「ねがい」には、時代の痕跡がとどめられていない。しかし私たちは、死者を悼み、平和を希求するそれらの穏やかな調べのうちに、生きるためのひとすじの希望を聞き取ろうとする。アムネスティインターナショナルのた

（3めん下につづく）

原爆被害を後世に伝える 「別の表現」

林光〈原爆小景〉を聴きながら

吉田みちお

原爆がもたらした地獄を描いた小説『夏の花』などで知られる原民喜の詩に、林光さんが曲をつけた『原爆小景』をメインとするこの演奏会には、被爆者三〇人が招かれたという。

二〇〇人近い観客を集め、午後四時半開演。林さん自らパツハの平均律をピアノで弾き、続いて東京混声合唱団による『原爆小景』。

「水ヲ下サイ アア水ヲ下サイ」

「天ガ裂ケ 街ガ無クナリ」
「オーオーオー」

ごくシンプルな詩句を連ね

る男声と女声が、第五福竜丸の船体に向かって響き合う。心地よい合唱に耳をすませるうちに、何かがあるように見える。それは、よく見かけられる原爆投下後の広島や長崎の記録写真のような光景ではなく、人間の悲しみの原型とも言い代わるような何か。

あのととき誰も、街と自分たち突然いつた何が起こったのかもわからず、原爆や被爆者という言葉も知らず、吹き飛ばされ、焼かれ、押し潰されていつた人たちの、どんな言葉でも言い表せない悲痛、切なさ、無情、孤独。そういったものが、目に浮かび、手にとつてさわられるような気がする。

限りなく清らかで、心底悲しく、ああ人間は本当に、生まれるときも死ぬときもひとりなんだと思う。

この曲に入る直前、林さんがこんなことを言った。ちょうどその頃、ニューヨークで開かれていたNPT（核不拡散条約）再検討会議で、長崎の被爆者・谷口稜暉（すみてる）さんが、一六歳で被爆し背中全面を真っ赤に焼かれた

写真を見せながら演説したことをうけて――。

「谷口さんの演説は素晴らしかった。私たちは、あのような被爆の事実を語る言葉に勝ることはできない。しかし音楽には、事実をくぐりぬけた向こう側、別の表現をする力がある」

その場で書き写したわけではないが、私にはそんなふうに見えていた。林さんが言う「別の表現」とは、いま目の前に見えている、この悲しみの原型のようなものことなのか。

長崎被爆者の長男である私は五年前、『カンちゃんの夏休み』という小さな本を手づくりした。爆心から南東に三キロの場所で、吹き飛ばされたはしたものの、激しい熱線や大量の放射線は免れ、今も元気な父のその後の半生を綴った。

父の被爆体験を聞き取り、いろんなことを調べたり、考えたり、イメージしたり、何度も書き直した。そのとき一三歳だったカンちゃんのことを思い、自分の中に生まれしてきた、それまで見たことの

ない新しい気持ちで、どうか表現してみたかった。友人知人らに配り、たくさんの感想や意見を聞いた。

林さんの「別の表現」が、美しい合唱曲として結晶していることを肌身で感じ、何かとても大切なことを教わり、励まされたような気がした。被爆者がみな高齢になり、数も年々減り続ける今、十年後、二十年後、そういうことが、いつそう大切な意味を持つてくるのではないか。自分がやってきたことを振り返り、ずっとそんなことを考えていた。

『原爆小景』に続いては、谷川俊太郎や宮沢賢治の詩などが、林さんの曲で、寺嶋陸也さんのピアノとともに合唱されるのを聴き、凜として清々しい時間が流れる。原爆被害の伝承、継承について、貴重な教えを受けたことを思い返しながらか、幸せな気持ちで過ごした二時間半だった。（よしだ みちおフリーライター、被爆二世）



めに書いた谷川&林による「歩くうた」は、まさしく時代をこえて通用する自由の賛歌だ。「みんな歩きながらうたえるように」は書かなかつた（作曲者）というこの歌（自由）に歩くうただもの。残念ながら手拍子にも不向きで、作曲者のジョークが証明された。

この日、鎮魂と平和の祈りにみちた（まつり）の積み荷を満載して第五福竜丸は船出した。世界のヒバクシャとの連帯に向かって、さらに、その先にある「調和の海」めざして、「若葉うづま」く五月に。

〔注〕*「調和の海」：林光のピアノ五重奏曲「ラッキードラゴン・クインテット」第三章のタイトルは「調和の海へ」*「若葉うづま」く：「原爆小景」の終章「永遠のみどり」は「ヒロシマのデルタに若葉うづまけ」という歌詞で始まる。

（いけだ いつこ／音楽評論家）

NPT再検討会議を ふりかえって

高原孝生

五月三日から二八日までNPT（核不拡散条約）再検討

会議が、ニューヨークの国連本部で開かれました。カバクチュラン議長（フィリピン）と彼を支えた中小国グループの奮闘によって、なんとか全会一致の合意文書を採用できたこと自体の意義を過小評価すべきではありません。とりわけ二年前の米印原子力協力協定によってNPT体制による不拡散の枠組みが壊れかけている現状では、「失敗を回避しただけで成功」という側面を否定できません。

ただ最終文書の内容には失望させられたのも事実で、当初議長案の先進的な内容が交渉の中で削られていく過程を私たちはまのあたりにしたのです。（ピースデポ『核兵器・核実験モニター』354号など参照。）しかし、次に進むための手がかりと思われるいくつ

かの点を指摘できると思えます。

第一は国連事務総長が果たしつつある積極的役割です。

二〇〇八年一〇月二四日の講演で潘基文事務総長は、核廃絶の緊急性を強調し、五項目の具体的提案を行いました。潘さんは、はっきりと核兵器は二度と使われてはならないと述べ、核兵器保有国である五大国の不興を買うリスクをいけませんでした。

今回の再検討会議に際してもNGO主催のサイドイベントに出席して、核廃絶こそが自分の最優先課題だと明言し、協働する市民活動の意義を強調しています。

とりわけ私たちは、潘さんの八月の広島訪問を、韓国社会に対して持つだろうインパクトをふまえた勇気ある行動としても、認識する必要があ

ります。

*

一昨年秋の事務総長講演のタイトルは「抑止のドクトリンが拡散防止をいっそう困難にしている」でした。今回の会議を通じてあらためて鮮明になったのは、核兵器の存在が安全保障にとって有益だと考える諸国と、脅威だと考える諸国との間の基本的な対立軸です。期限を切りながら核廃絶に進むという先進的な部分で最終文書案から次第に削られていったのは、明らかに前者の反対のせいです。

世界的には「核兵器はなくすべきだ」とする国が圧倒的多数ですが、日本政府を含め、先進国の多くは依然として「核抑止論」や「核の傘」論を奉じています。

この「核抑止論」が正面向から祖上に上りつつあるというのが、注目すべき第二点です。会議期間中には、核抑止論に真っ向から疑問を呈する内容の報告書が、メインストーリーに近い米国のシンクタンクから公表されるといって、画期的なことも起きました。

第三に、議論の中で核兵器

の「非人道性」がいっそう前面に出てきました。案外、核兵器国の国民には、このことへの認識がいきわたっていないのです。非人道的な兵器は、禁止されなくてはなりません。従来からそれを主張してきた非同盟諸国に加えて、オーストリア、スイスといった中立国、そしてNATO加盟国であるノルウェーまでもが、核兵器に対する新たな法的規制を主張しました。これには「核兵器禁止条約」をNGOが世界的にキャンペーンしていることや、再検討会議開始直前に国際赤十字委員会総裁が異例の声明をだし、被爆直後の広島に入ったマルセル・ジュノーによる惨状の描写を引きながら、今こそ核兵器の禁止と完全廃棄を、と訴えたことも大きな要因だと思われる。

*

あらためて第四に確認されるべきは、非政府組織・市民活動の重要性です。

五〇名以上の被爆者の方々が渡米し、炎天下のニューヨークの街を行進し、国連本部で原爆展を開き、たった一発

の核兵器がどんな惨害をもたらすのかを会議内だけでなく学校や教会でじかに伝えてくださったことの意味は、大きかったと思います。

いくつもの会場を設営し通訳等を務められた一〇〇名以上の現地の人たちには「この会合を絶対に成功させなくては」という強い思いが共有されていたようです。私も三つの学校と映画上映会にご一緒させていただきましたが、特に若い世代が、人間として受けとめ考えようとしている様子を見て、感動しました。

迂遠なように見えて、こうした一人一人の「人から人へ」伝える行動が意味を持っています。再検討会議の直後、六月五日は「核廃絶の日」とされ、世界各地で行動がありました。政府の政策に多数の理性の声をどう反映させていくかが、依然として課題です。（たかはら たかお/明治学院大学教授、協会評議員）

◇次号にニューヨーク行動に参加した大石又七さんのレポートを掲載します。

連載③

晴れた日に
雨の日に

—第五福竜丸とともに—

山村茂雄

〈承前〉

広田さんの熱意

人はなにかの機会を捉え、その生き方を定めていくものなのでしようか。

先に、広田重道さんは住居を横須賀から夢の島近くに移し、さりげなく記しましたが、住み慣れた生活環境を変え、私財をかけての第五福竜丸保存への「肩入れ」は、並大抵のことではありません。

その経歴は前にふれた通りですが、そう言ってよければ、広田さん「晩年」の見定めた生き方には、特別の思いがあったように思えます。

夢の島の泥の底に沈む第五

福竜丸、その船の叫びを聞き取るなかで、かつて推理小説誌『新青年』に一位入選した文学青年の「滾る熱気が溢れでたようにも思えます」。

広田さんが亡くなったのは、一九八二年四月二十七日、心筋梗塞による急性心不全、享年七四歳でした。広田さんが最初に狭心症で倒れたのは八〇年の三月九日。四月二十八日には退院、五月からはバスで展示館に通い、徐々に活動を戻し、八二年の四月一二日から一四日には福岡に講演にでかけてもいたのです。

平和葬から浮かぶ広田さん

広田さんの葬儀・告別式は

五月一四日、東京千日谷会堂で

「故広田重道平和葬」として執り行われました。葬儀委員長は三宅泰雄第五福竜丸平和協会会長、委員には井尻重午（反帝同盟会）、小笠原英三郎（日本平和委員会）、金子満広（日本共産党）、草野信男（日本原水協）、羽仁説子（日本子どもを守る会）の各氏があたりました。

吉田嘉清日本原水協副理事長による経歴紹介に次いで関係団体の弔辞が述べられました。弔辞のそれぞれは、故人の人物、業績を端的に語りました。「学生寮に私と生活を共にしながら反戦ニュース、反帝ニュースの原紙を切り印刷しました。ある日の早朝、警察に襲わ

れ、私がかまごして居る間にあなたは窓から飛び降り難を逃れました。それにしても今度のあなたの最後は少しすばしこすぎた」井尻重午さん。

「ヒロシマ・ナガサキ・ビキノの本質を統一的に捉えよ、というあなたの至言は、いまでも耳に響いています」小笠原英三郎さん。

「あなたの丸ごとの実践家として、生きものである運動の中に立ち続けました。歴史に名を残すと言われますが、広田さんは歴史そのものを遺しました」草野信男さん。

「平和のモニュメントとして、保存に努力された第五福竜丸は、この世の移り変わりを静かに眺め、地球上に人類を保存することを世界に訴えるでしょう」檜山義夫さん。

久保山すすさん、見崎吉男さん、東京都知事、日本被団協など多くの弔電が寄せられました。

核なき世界へのねがい

葬儀委員長の三宅さんは、参列者への謝意を述べたあと、より多くの人の展示館への参観をよびかけました。そして「広

田さんはその晩年、第五福竜丸保存に渾身の力をそそがれ、展示館の完成を達成されました。その限りにおいて広田さんは自分の志を遂げられたと思います。残された遺志のひとつはビキノ水爆事件を中心とした原水爆被災資料館の建設でした」とこの事業への協力を要請したのでした。

「海を連想させる青い布のなかにマイクを持つ写真を飾りました。広田さんの遺志をついで太平洋が文字通り平和な海になるように、お互いの気持ちで固めたいと存じます」平和葬の閉会の辞を田沼肇平和協合理事はこう結びました。参列者は二〇〇人を超え、広田さんを偲びました。

この年八二年は、三月の「ヒロシマ行動」、内外の反核世論が高揚していました。「平和葬」から九日後、二三日の「東京行動」（上野公園）には四〇万人が参加しました。展示館来館者も、三月は七〇〇〇人、開館から六年の来館者は延べ三〇万人に達しようとしていました。（やまむら しげお／第五福竜丸平和協会顧問）



久保山すすさん（中央）を案内する広田さん（1977年9月撮影・森下一徹）

三井周さんを偲ぶ 船の保存にかけた行動の人

深井平八郎

第五福竜丸の船体保存に地元江東で最初に取り組みはじめ、第五福竜丸平和協会の評議員（現・顧問）を長らく務められた三井周さんが去る三月八日に亡くなりました。八〇歳でした。三井さんが初めて第五福竜丸を見に行ったのは一九七八年の三月初旬、以来、まさに縁の下の力持ち的存在で尽力されました。展示館の開館の日、感想ノートの中に三井さんの言葉が記されています——夢の島に『夢』実現。九年間の保存運動。展示館完成——江東区のとくくみで当初から一緒された深井平八郎さんにご寄稿いただきました。

ヒロシマ、ナガサキ被爆から六五年。ストックホルムアピール支持署名運動開始から六〇年。ビキニ水爆被災から五六年。第五福竜丸（はや

ぶさ丸）が廃船として発見され、物言わぬ「生き証人」として保存運動が始まって四二年。第五福竜丸展示館開館から三四年。昨年プラハでのオバマ大統領の原爆使用についての『道義的責任』演説以来、核廃絶へ向けた内外の世論と運動が高揚しています。

当時、江東原水協の事務局は東京建設従業員組合にあり、三井さんは組合の書記長でした。福竜丸は埋立て途上のゴミと蠅が群がる「夢の島」に廃船として係留され左舷側に淋しげに傾いていました。干潮時には周囲の水面に廃船と



なつた木造船の竜骨や肋骨が無残な姿で多数露出しており、そこは木造船の墓場でした。

区内の心ある方々の間で船の保存について多面的な議論が交わされ、船の終焉地である「夢の島」で「生き証人」として蘇らせるのが最適ではないだろうか、とそれぞれの思いが一致していきました。

展示館開館まで、江東区では保存運動の「三羽ガラスと紅一点」などと呼ばれ、三井周・若島幸作・深井と、青木（旧姓古泉）佳子さんが運動の核となっていました。

三井さんは普段は寡黙でしたが、必要な時は的を得た発言で行動提起をしていました。誠実な人柄は組合員の信頼も厚く、島田徹之助さん親子や山口秀夫さんなど船の見回りと応急修理や排水など、日々の献身的活動の要になっていました。

広田重道さんの働きもあり、東京都の協力と各界代表八氏による「訴え」が出され、さらに保存委員会も発足しました。運動の広まりと深まりは全国規模になり、埋もれた資料の発掘や事件当時の関係

協会にたいし第一回焼津平和賞

焼津市が創設した第一回焼津平和賞に第五福竜丸平和協会が選ばれました。同市は、第五福竜丸の母港をもつ自治体として核兵器の廃絶、恒久平和に貢献してきた個人・団体を顕彰するとして焼津平和賞を設け、推薦を広くよびかけていました。

審査は五月三一日におこなわれ、広島、長崎を含む有識者七人による選考委員会（委員長・佐藤博明元静岡大学長）で、協会と展示館の活動を——船体の保存、資料収集や展示、多彩な企画と各地での第

五福竜丸パネル展など、ビキニ被災の実相を広く伝え継承し、核兵器廃絶を発信しつづけてきた——との評価で協会に授与されることになりました。六月三〇日には、焼津市で授与式がおこなわれます。

なお、六月一三日には焼津市の清水泰市長が来館し、受賞を協会の川崎昭一郎代表理事に伝えるとともに館内を熱心に見学しました（写真右清水市長、左川崎代表理事）。

平和賞受賞の記念会

第五福竜丸平和協会では焼津平和賞受賞の記念会を10月16日（土）午後2時よりおこなう予定です。詳細は追ってご案内いたします。



者との接点、協力が広がりました。三井周さん、ありがとう。

「第五福竜丸は人類の未来を啓示する」（故三宅泰雄）、

核廃絶への世界の運動は継承発展しています。黙祷。

（ふかい へいはちろう／元石川島播磨重工平和委員会）

協会顧問

小佐田先生を偲ぶ

川崎 昭一郎

小佐田哲男先生が三月二三日に心不全で急逝されたとの連絡を五月はじめにご親族からいただきました。八五歳でした。

小佐田先生は長年にわたり財団法人第五福竜丸平和協会の評議員を務められ、また昨年一月、公益財団法人へ移行した機会に顧問に就任され、引き続き第一線での活躍が期待されていきました。十一月二八日の公益財団法人発足記念祝賀会にも参加され、元氣一杯のスピーチをなさいました。



小佐田先生は一九八五年の第五福竜丸船体の全面的改修工事で調査指導に当たられました。

それから二〇余年が経過し、第五福竜丸の傷みが随所に見られるようになり二〇〇八年に発足した「船体等保存検討委員会」にも積極的に参加下さっているところでした。

以下は展示館開館三〇周年に寄せられた先生の一文です。

おとうふの船
くらげなす芥(あじ)の中に傾
きて沈みて果つる運命な
りしを

沈めてはならじとあつ
きみこころを糾(あ)めたまへ
る地元諸卿姉

このおもいを胸に、先
輩・竹鼻三雄教授(東大
船舶工学科・船体強弱学)
ならびに岩崎友吉大兄

(東京国立文化財研名誉研究員)の驥尾(きび)に付して初めて参入した展示館内の景(けい)一(いち)架台(かだい)に乗せられて日も浅(あ)いころの船を一瞥(いちげつ)した時の筆者の思いは《愕然(おどろ)》の一語(いちご)に尽(つ)きた。

総噸(そうとん)数(かず)一〇〇噸、長さ三〇米(メートル)の鰹(いわし)船(せん)を、長さ一米(メートル)未(ま)満(まん)の模(も)型(がた)船(せん)同(どう)様(よう)、二個(に)所(ところ)だけ(だけ)で支(た)えてあつたこと(こと)に(に)あ(あ)る。

そのあつきみこころと技(わざ)こ凝(こ)り修(しゆ)復(ふく)成(せい)れりわれらが竜(りゅう)は
としどしの桜(さくら)吹(ふ)雪(ゆき)に翼(はば)得(え)て宇(う)宙(じゆう)を巡(めぐ)れ不(ふ)戦(せん)の叫(こゑ)び

私は五〇数年前東京大で科I類(けい)の学(がく)生(せい)として教(きょう)養(やう)学(がく)部(ぶ)で図(ず)学(がく)・製(せい)図(ず)を学(ま)びました(が)、最近(さいきん)になつて懐(なつか)しい当(た)時(じ)を偲(おも)ひながら小佐田先生と交(まじ)わした会(かい)話(わ)が非(ひ)常(じょう)に印(いん)象(ざう)的(てき)でし(た)。

小佐田先生のご冥福(めいふく)を心(こゝろ)よりお祈(いの)りいたします。(かわさき しょういちろう/第五福竜丸平和協会代表理事)

教科書に第五福竜丸に関連する読み物

来年度から使われる小中学校の教科書に、ビキニ事件・第五福竜丸の被災に関連した記述が掲載され、人の生き方、平和を考えるテーマが設定されています。

*

◇三省堂の『小学生の国語六年』には、気象学者であり第五福竜丸平和協合理事を長くつとめられた猿橋勝子さんの半生が一〇頁にわたり紹介されています。

一九六八年、猿橋さんは、米カリフォルニア大学スク립ト海洋研究所で半年にわたる海中の微量放射性物質の

測定作業にあたります。それは核開発競争で繰り広げられた核実験、第五福竜丸の被災などで引き起こされた環境問題が背景にあつたことでした。

恩師三宅泰雄博士(地球化学者)からの激励、後進の女性科学者のための猿橋賞を設けるなど、猿橋さんの生き方から学び考えようとの内容です。

◇東京書籍の『中学道徳3明日をひらく』は、第五福竜丸元乗組員大石又七さんの被爆体験と事件を伝える証言活動をつづる「伝えたいことがある」が七頁にわたり収められています。



水爆プラボーによる被災の様、放射線障害による入院と退院後の辛い生活、被爆体験をつうじて核の恐ろしさを伝えようとの活動とそのきっかけになった中学生との出会いなどが紹介されています。第五福竜丸の被災についての資料のコーナーも設けられ、現在の展示館も紹介されています。

来館者日誌



4月から6月は修学旅行の小中学生で連日にぎわいます。中学生では三重県内から3000人超、愛知県内からもグループ学習で40校以上が来館しました。

◇5月2日 元乗組員・久保山愛吉さんの長女みや子さんと藤男さん一家が来館。長男敦司さん奈穂美さん夫妻と綾香さん(小5)裕唯さん(小2)、次男の直人さん。展示館開館直後の1977年に母のすずさんと来館されて以来33年ぶりです。夢の島公園の変貌ぶりと、にぎやかな館内に驚いたようでした。みや子さんは「私たちにとっては思い出したくないこともたくさんありますが、第五福竜丸のことが忘れられては困ります。どうぞこれからも船を守ってってください」と話されました。

◇5月12日 元乗組員・高木兼重さんの次女美恵子さんと親戚のみなさんが来館。高木さんは退院後郷里の漁協に就職しましたが、見舞金のことでいやな思いをして転職。美恵子さんも心ない陰口に悩んだそうです。

このほかビキニ事件当時、大阪から駆け付けて第五福竜丸の放射能測定を行った西脇安さんの助手だった古久保俊子さんが家族・友人と来館されたほか、企画展の片岡脩さんの友人や親戚などの来館もつづいています。(上の絵は小学1年生・佐野心朗くんのメッセージ)

船をみつめた瞳 ＜修学旅行生からの手紙＞

◇死の灰の話をいまでも全部おぼえています。とても悲しくて生きる大切さをかかんがえました。(山梨 小6)

◇核は多くの人を傷つけるのだから、国を守ることはできないと思います。核についてみんなに考えてもらいたい。それ

が世界から核がなくなる第一歩になると思います。(京都 中3)

◇死の灰はいまでも乗組員だった人々を苦しめていると知りとても驚きました。たくさんの千羽鶴やイラストをみて、私も核兵器のことを忘れてはいけなと思いました。(岩手 中3)

◇第五福竜丸は原爆ドームと同じことを伝えているんじゃないかなと思いました。(岩手 中3)

◇互いに武器を向け合って得られる平和はまさに一触即発である (大学1年)



(写真・片岡脩ポスター「ラブ」前でピースサインの中学生)

コンサートの感想から

◇この船の傍らで、音楽はなんとという響きたかをするのだろう。乾いた大地に沁みこむ雨のように、心と船体にしみこんでゆくのだ。音楽が光を、乾きをいやしてくれる存在であることを強く感じた。

◇「あの場所だから」とあまり期待もしていなかったが、「あの場所だから」こそその素晴らしさに感動した。船体に包まれるような場所で聴く「水ヲ下サイ」が体の奥までしみた。普通のコンサートホールでは味わえない。

◇水をください…あの日、私はその声を聞いたのです。

◇音が素晴らしいだけでなく、林さんのあたたかい語りをベースに、平和を願うみなさまの思いが一つに溶け合ったひとときでした

◇船に向かって歌うのは初めてです。聴いている方たちの思いが歌っている私たちと船にひびきあっていました。

理事会・評議員会開催

公益財団法人第五福竜丸平和協会2010年第2回理事会が5月15日に展示館資料室で開催され、平成21年度後期(2009年11月2日より2010年3月31日まで)事業報告及び決算報告について審議決定しました。

引き続き5月22日に2010年定時評議員会が学士会館で開催され、平成21年度後期決算に関して理事会の決定及び監事による監査を経た財務諸表(貸借対照表、正味財産増減計算書、同内訳表及び財産目録)について審議、提案通り可決承認されました。

なお、長年当法人の監事を務めてこられた清水幹雄氏より健康上の理由で今決算の監査を限りに監事を辞任したい旨の申出がなされていましたが、評議員会でこれを了承し、後任の監事として立正大学大学院教授・税理士の浦野広明氏を選任しました。

平成21年度後期収支の報告

(単位:円)

経常収益(合計)	9,807,246
基本財産運用収益	12,500
事業活動収益	9,324,321
受取会費	249,000
受取寄付金	204,948
雑収益	16,477
経常費用(合計)	10,119,597
事業費(計)	9,367,821
公益目的事業	
(展示保存資料収集普及広報)	8,753,293
その他の事業(出版物記念品頒布)	614,528
管理費	751,776
当期経常増減額	△312,351
基本財産評価損益等1)	1,200,000
当期一般正味財産増減額	887,649
一般正味財産期首残高2)	7,447,540
一般正味財産期末高3)	8,335,189
正味財産期末残高	8,335,189

- 1) 美術品(ベンチャーの素描7点)を、公益目的事業を行うために不可欠な特定の財産として定款に記載したことによる
- 2) 前期繰越収支差額のこと
- 3) 次期繰越収支差額のこと
- 2), 3) のいずれにも基本財産7,500,000円は含まれていない